

仏画に魅せられて

何故私が「仏画」を描いて生活するようになったのか。よく質問を受けることがあります。この機会に改めて簡単にまとめてみたいと思います。

よくよく考えてみると、1冊の本を読んだことが、私の人生を決定つけたことになるのです。それは、40年も前に想いを馳せなければなりません。

快適な入院生活で



幼い頃の筆者

私が小学校2年生の夏、盲腸炎の手術を受け、2週間の入院の後、めでたく退院をしてきたその夜、原因不明の高熱と湿疹で病院に逆戻りをしたことがありました。

約1ヶ月間の闘病生活を余儀なくされたのですが、今でいう院内感染だったと思われる。

入院後、担当医は病名すら分からなかったらしく、当然ながら治療法も分からないまま数日が経ちました。親戚の叔母たちは、もう助からないと思ったそうです。

後に母から聞いた話によると、入院後、数日経った夜、「やっと病名が分かりました！」と隈のできた眼を輝かした若い担当医が、一人息子の安否を気遣ってヘトヘトになっている母をたたき起こし「これで、治療法が分かりました。明日から適切な薬を投与します。」母は、見事にそのむずかしい病名を忘れてしまって、私は、未だに病名は知りません。ただ死にかけたという事実は本当らしいのですが、その後適切な薬を投与してもらい、みるみる回復していったそうです。

普段ならアイスクリームなど絶対買ってもらえないのですが、ダダをこねる私のいいなりの母は毎日のようにそれを買ってきてくれたのです。私の記憶では快適な入院生活のみが、記憶として残っています。

「フランダースの犬」

その入院生活で、叔父からのお見舞いとして貰った児童文学小説「フランダースの犬」を読んだことが、何よりも絵を描くことの好きだった私の絵に対する価値基準を決めたように思うのです。

主人公の少年ネロ（だったと思うのですが）が冷たい雪のなかで死の直前にあこがれだったルーベンスの絵を神の技が偶然か教会のカーテンがはずれて観ることができ、愛犬と共に安らかに天国へ・・・確か、こんな話だったと思います。

「ネロと愛犬パトラッシュは安らかに天国へ行きました。」で終わるこのお話は、その時の私の記憶に生々しく、手術台に寝かされ、恐怖と痛さの中、全身麻酔を受け意識の薄らいで行く自分と主人公ネロの安らかな死とが対比的にオーバーラップしたのでしょうか、「絵ってすごいんだ人を安らかに幸せにすることができる。」そう思ったこと、また絵を描くことが好きだった幼い私の潜在意識に絵の価値基準を刷り込んだことは確かなようです。

余談になりますが、幼い少年の私にはルーベンスの絵がどんなにすごい絵なのか想像すらできなかったのですが、後にルーベンスの作品を間近に観た時、宗教画の描写は素晴らしいのですが、女体の表現が肉感的で生々しく感じて、好きになれなかったのを覚えています。



高校時代に心を奪われたラファエロの聖母子像

西洋の宗教画に憧れた青春時代

そんな絵に対する想いが常にあったものですから高校から始めた油絵はやはり宗教的な匂いのするイタリアルネッサンス期の巨匠たちの模倣でした。でも、くやしやかな模倣するにも技術が伴いませんから、描く絵はやはりその頃の流れとして印象派の画法を真似ることに終始していたようです。いずれ自分は美大へ進学してテンペラ画のような西洋の伝統的な描法を勉強しようと考えておりました。

ところがお役所勤めや銀行勤めを希望していた父親の猛反対にあい美大への進学はあきらめざるをえなかったのです(父と母は、自分達の仲人だったある画家の悲惨な生活と壮絶な最後を身近に見ていたのです)

高校生活の後半は、そんな父親の反対にすねた私は、アルバイトで少しのお金を手に入れ、油絵の制作とオートバイ・当時流行りのエレキバンドで気を紛れさせていたのです。



高校時代、美術部の皆と京都の美術館へ。 左が筆者

染織図案家に弟子入り

その頃の私はとにかく父親の希望通りの職業など眼中にはなく、絵筆を持って生活したいの一念でしたので必死で職を探しました。しかし、世間知らずの少年には、特殊な職業をたやすく見つけることはできませんでした。



内弟子時代の筆者

そんな頃、京都で染色業を営む叔父に「図案家」という職業があると聞いてさっそく見学させてもらうことになりました。

私の青春時代を全てゆだねた 故 本澤一雄先生はその頃飛ぶ鳥をも落とす勢いで、ご活躍中でした。

画室に入れて頂いた時、何人かのお弟子さんの描いているそれまで見たこともない日本の文様がキラキラ輝いて見えたものでした。

「10年間の修業で独立していただきます。」という先生のお言葉に

「よろしくをお願いします。」

かくして、絵を描くことが何よりも好きだった少年は、この日から絵筆を持って生活できることになったのです。

染織図案家(テキスタイルデザイナー)について古くは、尾形光琳や円山応挙などに始まり、当時の優れた絵師が、需要に応じて各工芸品の図案を提供していたようである。

明治以降、画壇の西洋化に伴い、伝統的な描法では生活できなくなった絵師たちの一部が、伝統工芸作品の図柄を和洋両面から担当するようになった。

大正から昭和にかけて、さらに、着物の需要が進むにつれて、染織図案の専門職として「絵かき」を集め、派を超えて図案を描く画塾が現れ、中央画壇から離れた。

昭和になり、洋服の輸入で、和と洋の専門職に別れ、それぞれの染織図案家を育成する為の「画塾」が数多く生れたが、中でも和装図案の制作には、より伝統的な技法の習得が不可欠とされた。

日本画の世界にはほとんどなくなってしまった徒弟制度は、学校制度では伝えきれない日本の伝統的な美意識や精神も伝えて来た。それらの画塾やグループが集まり、「(社)日本図案家協会」などを設立。伝統様式と新しい感性を融合させ、新しい日本の図柄が現在も生み出されている。

入塾より4年目で準会員となり、その後、師の勤めと正会員2名の推薦により正会員推荐される。

社団法人 日本図案家協会

修行時代の図案による中振り袖

日本図案家協会に籍を置く

こうして日本の伝統美を追求する毎日が昼も夜も9年間続きました。他の弟子仲間より1年早く独立させて頂いた私は、日本図案家協会、京都染織デザイナー協会、玄図、桂会など大小の会に入会し、順調に図案家として歩き出したのです

妻と子供2人と自由業の私、ごくあたりまえの生活が続き
ました。
依頼の仕事を引き受ければ良いのに個展活動を始め、妻を不安にさせていたその頃、仕事はおもしろいのですが何故か虚しさが残る・・・
それが何なのかその頃の私には分からなかったのです。
自分の夢だった絵筆を持って生活しているのに……。



図案の個展活動の頃の作品

最初の仏画、悲母観音図

そんなある日、田舎の父から電話、「西国三十三所の巡礼をしたいのだが集印軸の観音さんの絵描いてくれや、お前やったら描けるやろ！」
絵描きの道を反対した父が、私に観音さんの画を描いてくれと言ってきました。
うれしかったのですが「うん、暇な時にでも描いとくわ・・・。」と年柄もなく、つっぱって気のない返事をしてしまったのを覚えています。
電話を切ると、すぐさま、今まで開けることになかった美術全集の仏画のページを開きました。
狩野芳崖の悲母観音。これがいい、これを写そう。
悲母観音を描いていると、わたしの内に20年前のあの描きたかったイメージがふつふつと蘇ってくるのを感じたのです。
描いていて心地いいのです無心になれるのです。
今、思うとルネッサンスの巨匠達の絵に仏教的に言うと慈悲・慈愛の表現を感じていたのかもしれない。
同じだったのです、仏画と。
図案家として勉強してきたことが私の本当に表現したかったことを可能にしてくれたのです。描きたかったテーマの表現が、その頃の自分には可能になっていたのです。
描法は西洋画とはぜんぜん違いますが、そのテーマを同じように表現できたのです。
これはもう私にとって驚きでした。絵描きにあこがれていた頃の自分がそこに居たからです。

仏画を描いて生活したい

私にとって最初の仏画がなんとか完成するとすぐに父に送りました。
それから幾日もたたないうちにまた父から電話、父の友人二人も描いて欲しいとのこと、気を良くした私は考えました。
仏画を描いて生活できないものか、しかし、甘くはないにちがいない・・・。
自分には妻も子供もいる、仏教のことだってほとんど知らないし仏画についても知識は皆無。ただ自分にあるのは仏画が描きたい一心とそれまで培ってきた伝統技法とノウハウのみ・・・。
今もそう思っているのですが、その時は特に自分は仏画を描く為に今まで日本の伝統的技法を勉強してきたのだ。遠回りしてきたけど誰かが私に仏画を描かす為にそうさせたのだ。そうにちがいない、と思うようになっていました。

西国第二十番札所 善峯寺



大きなお寺「西国二十番札所善峯寺」
重文の多宝塔を望む

お寺の本堂に頒布用の高級集印軸として置いていただくことになりました。

プロとして始めた当初、仕事があうすくなってその月の生活に困っていると、決まって何故かその観音図の集印軸が売れ、度々救われたことがあります。まさに観音様のお慈悲で、今があるということでしょうか。

(もし、読者が、集印軸をお探してしたら、ぜひとも二十番札所の善峯寺(075 331 0020)で、私の描いた観音図のお軸(右写真)をご覧になって下さい。きっとお気に召して頂けると思います。また、2000年4月にオープンする寺宝館・文珠堂の正面玄関には、私の近作「平成釈迦金棺出現図」も掲げられています。)

悩んでいてもしょうがないので自宅から見えるあの大きなお寺、善峯寺へ相談に行くことに決心しました。私のようなお経もろくに読めない者が仏画を描いて生活しようというのはいかなものか、仏さんに失礼じゃないのか。わたしのぶしつけな相談に掃部光暢住職と光昭副住職はあっさりとうろ答えて頂きました。「坊主には坊主の修練があり絵描きには絵描きの修練があるのですからどうぞ自由におやりになってはどうか、描けたらまた見せて下さい。」

数カ月後何点か描いてお見せすると気にいって頂き



今も、善峯寺の本堂で販売されている集印軸の観音図部分

仏画工房 楽詩舎



工房創立時のメンバーでスリランカへ旅行した時の写真 1995年

それから約15年、無我夢中で描いてきました。古家を手に入れ、仏画工房 楽詩舎とし、弟子と共に大作から小品まで約3600点の仏画を描かせて頂いてきました。

仏縁と言ってしまうと一言でかたづけますが、いまこうして仏画を描かせていただけるのは、私を見守って頂いている皆様のご協力・ご支援・ご指導があつてこそ、感謝せずにはおれません。

絵描きでありながら中央画壇とまったく縁のない陽の当たらない場所で毎昼夜、仕事仕事。モグラ生活もなかなか気楽でいいのですがそうも言っておられません、モグラの存在くらいは世間に知っておいて欲しい。

かつての私がそうであったように仏画の制作過程など画学生ですら知る術がないのです、仏画こそが伝統的な日本画なのですが、現代では、あまり評価をされていないようです。感情表現や個性をだいにする現代絵画の底辺に、名もなき絵師たちが己を殺して制作している「仏画」のあることを少しでも知って頂きたいのです。 合掌

ふじのしょうかん